

会報

◇奈良大学史学会総会

本学において奈良大学史学会総会を開催した。二〇二四年度の決算・会計監査報告および事業報告がおこなわれ、つづいて二〇二五年度の役員人事案・事業計画案とそれとともになう予算案が提案され、それぞれ原案どおり承認された。

△二〇二五年度役員

△会長
△副会長
△教員委員

(編集)

(庶務・会計)
(庶務・交換)
(監査)

高島 葉子／木下 光生
河内 将芳
村上 紀夫
木下 光生

△学生委員
(代表)

下濱穂乃華

川地由季乃

(副代表)

(会計)

(二回生委員)

清水 悠蘭

梶清 有希
牧田 華奈

山口 桃香

播本 遊馬

西村 結人

西村 結人

山口 桃香

播本 遊馬

西村 結人

◇特別講義

・二〇二五年七月二八日(月)

嶋中博章氏(関西大学文学部)

「ルイ一四世時代のヴェルサイユ宮廷」

・二〇二六年一月二六日(月)

伊藤淳史氏(京都大学大学院農学研究科)

「小麦とコメからみる戦後日本とアメリカ——農業史の面
白さ——」

◇大学院特別講義

・二〇二六年一月二三日(火)

宮本ゆき氏(デュポール大学宗教学科)

「核被害における言語化と非言語化の抵抗」

◇史学科バスツアー

・第一回 二〇二五年一〇月一九日(日)

見学先是、滋賀県下、恭仁宮跡・紫香楽宮跡・近江国庁跡・建部大社・石山寺。

・第二回 二〇二五年一二月七日(日)

見学先是、奈良県下、郡山城趾・城下町・今井寺内町・八木宿場町。

◇二〇二四年度優秀論文

谷川陽香氏の卒業論文「足利義輝論—幕府権力再生政策における大名間調停の役割—」が優秀論文に選ばれ、学位授与式に表彰状が授与された。これまで選ばれた優秀論文はつぎのとおり。

・二〇二一年度

森本朱音「初期室町幕府における足利直義の政治—裁許下知状から見える政治思想—」(『奈良史学』四〇号に掲載)

平祥一「BCOFの日本占領から考察する第二次世界大

戦後の国際関係—ニュージーランド軍の萩地域占領活動を中心

心に—」(『奈良史学』四〇号に掲載)

・二〇二二年度

島松勇斗「信貴山城の戦い以後の織田信忠の立場の変化」

濱松里美「室町・戦国期における後鳥羽院怨霊についての考察—水無瀬御影堂と足利氏をめぐって—」(『奈良史学』四一号に掲載)

四一号に掲載)

高村風歌「近代日本における少女像の変容について—『少女の友』投書欄の分析より—」(『奈良史学』四一号に掲載)

大橋怜奈「キリスト教図像学から見た不思議の国のアリス」

(『奈良史学』四一号に掲載)

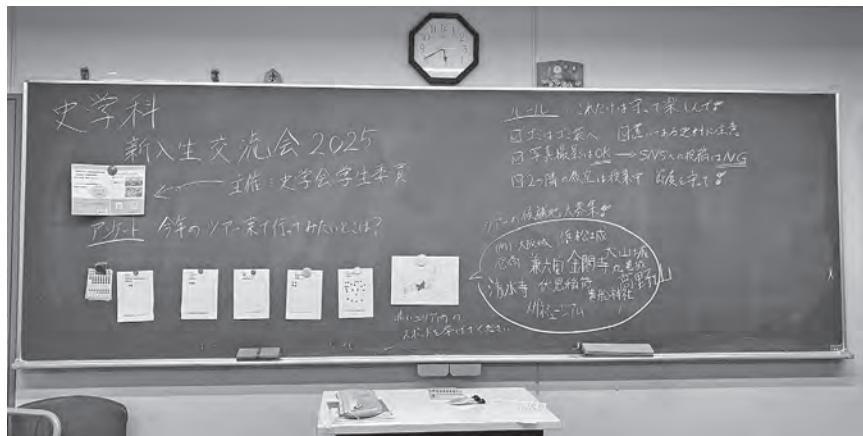
・二〇二三年度

小池裕介「明治初年の農民騒擾—飯田二分金騒動を中心に—」
中田悠斗「一九三〇年代の国際観光政策と地域社会—愛知県蒲郡を事例として—」

◇新入生交流会

春に新入生が入学し、学生委員にも新たに一人のメンバーが加わってくれました。また現在、三回生の学生委員が在籍していないため、二回生が中心となり活動しています。

手さぐりのなかで至らぬ点も多いですが、この一年を通して二回生中心だからこそできる新鮮で新たな試みをいく



つか実行する」と
とができまし
た。

その新たな試
みの一つとして

四月二二日に史

学科の新入生を

対象として「新
入生交流会」を
開催しました。

この試みは新型

コロナウイルス

流行前の二〇一
九年以来、六年
ぶりの開催とな
りました。

当日、たくさ
んの新入生が参

加し、学生委員
が用意したお菓
子

が無くなつてもなお、話が弾んでいるすがたもみうけら

れました。企画した学生委員としては新入生にとつてよい
機会を提供することができ、やりがいを感じたのに加えて、

学生委員の活動のアピールの場としてもよい機会になりました。

◇青垣祭

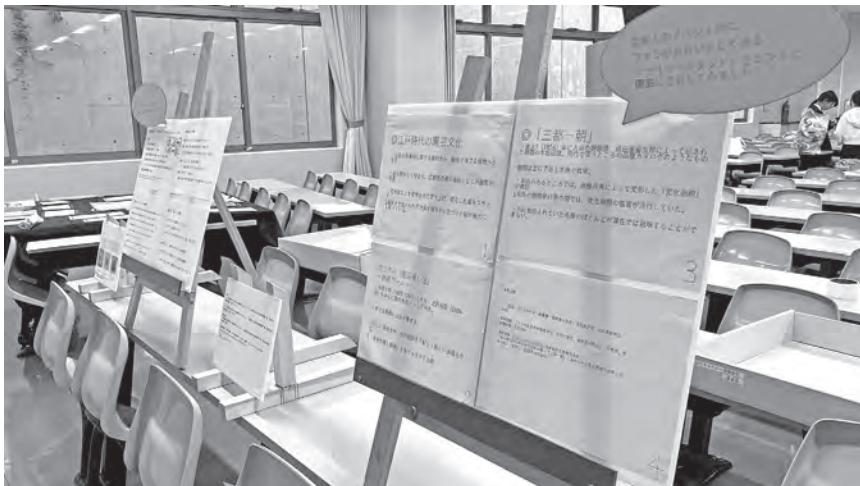
二〇二五年一一月二・三日の二日間にわたつて青垣祭が
開催されました。学生委員も例年と同じく展示ブースを開
きました。展示内容としては次の三項目です。

・史学会(史学会学生委員)の紹介コーナー

今回のブースの一貫してのテーマは「奈良大学史学会に
ついて気軽に知つてもらおう!」でした。そのため、毎年
作成していた冊子の配布のかわりに史学会、そして学生委
員の活動を簡単にわかりやすく説明したパネルを作成しま
しました。

・学生委員によるテーマ展示

毎年恒例の学生委員の間で話し合い、テーマを決定し、



おこなう展示。今年のテーマは「推し活」でした。今日、世間で流行している話題を学生委員独自の視点から深掘りし、パネルを作成しました。

・史学科所有の史料展示

史学科が所蔵する史料の一部を公開しました。実際に手にとつていただけるかたちにして、とくに全国の駅名が記された史料は多くの方々が馴染みのある駅名を楽しみつつ、探されているようすがみられ、展示ブースに常駐していた学生委員と話が弾む場面もありました。

また、今年の新たな試みとして展示する史料の一つ一つに簡単な解説文を添えること

でお越しになつた方々が史料について理解しやすくなる工夫をほどこしました。

二日間に渡つて在校生のみならず、保護者の方々、そして卒業生やオープンキャンパスで来校された高校生など様々な方々にお越しいただきました。史学会、そして史学会学生委員のことを多くの人々に知つていただくよい機会になつたと思います。

来年度もより皆さんに親しみ・興味をもつて楽しんでいただけるような工夫をこらしたブースの開催を考えています。

◇学生委員主催の史学会ツアーア

今年度の学生委員主催のツアーアは当初、行き先に大阪万博を予定していましたが、諸事情により中止にせざるをえなくなつてしましました。そのため現在、行き先を変更したツアーア計画を学生委員のあいだで立てています（二二月二一日に彦根城・安土城ハシゴツアーアが実施されました）。

◇会員消息

- ・井岡康時教授が三月三一日付で定年退職された。
- ・外岡慎一郎教授が三月三一日付で定年退職された。
- ・奥本武裕教授が四月一日付で着任された。
- ・海津一朗教授が四月一日付で着任された。
- ・宮本亮一准教授が『シルクロードのコイン1』（帝京大学シルクロード叢書〇〇一）に「ヒンドゥークシユ南北の貨幣とその周辺」を発表した。
- ・村上紀夫教授が創元社のnoteに「『幕末女性の生活』もうひとつの物語」を発表した。
- ・渡辺晃宏教授が『歴史評論』九〇一号に「平城宮・京研究の現在」を発表した。
- ・井岡康時元教授の共著『「隣民の後裔」を生きる—北原泰作と部落問題—』が刊行された。
- ・奈良大学文学部史学科と奈良県地域創造部文化財課が共同でおこなつてきた調査の成果『令和六年度 奈良県内古文書所在確認調査報告書』が刊行された。
- ・足立広明教授がNewspicksに「ビザンツ帝国編3・古代末期の女性とジエンダー規範の変容」を発表した。
- ・村上紀夫教授が『藝能史研究』二四九号に「閔蟬丸神社と

京都悲田院—寛保年間の近松寺訴訟一件をめぐってー」を発表した。

・村上紀夫教授が第三四回日本宗教民俗学会大会公開シンポジウムにおいて「宗教のメディア史的考察—恵信と遍路関係史料の周辺ー」と題した研究発表をおこなった。

・奥本裕武教授が執筆した『人権を読み解くキーワード・1』（一般財団法人奈良人権部落解放研究所編集・発行）が刊行された。

・村上紀夫教授の著書『増訂 京都地蔵盆の歴史』（法藏館文庫）が刊行された。

・足立広明教授が執筆した『古代・中世キリスト教における女性イメージ』（教文館）が刊行された。

・木下光生教授が目録・解題を執筆した奈良大学文学部史学科・奈良県山添村教育委員会編『山辺郡山添村大字上津 古文書 調査報告書 中西家文書目録・解題 山添村文化財調査報告書 第6集』が刊行された。

・木下光生教授と山口育人教授が World Economic History Congress 2025（世界経済史学会）〇一五、於・スウェーデンのルンド大学（Lund University）において研究発表をおこなった。

・木下光生教授が「高大連携歴史教育研究会・第一回大会」「特別部会パネル 高校生の発表の場をいかに広げるか—歴史研究を中心にー」において「奈良大学「全国高校生歴史フーラム」から考える高大連携の歴史教育」と題する研究発表をおこなった。

・足立広明教授が京都ギリシアローマ美術館において「女性詩人プロバとエウドキアーウエルギリウスとホメロスの詩句で紡ぐ聖書物語ー」と題した講演をおこなった。

・足立広明教授が東方キリスト教学会において「エウドキアの『ホメロス風聖書物語』（Prima Homeroantonum conscriptio）とその写本伝統について」と題した研究発表をおこなった。

・外岡慎一郎元教授が『歴史評論』九〇五号に「書評・黄霄龍著『日本中世の地方社会と仏教寺院』」を発表した。

・木下光生教授が執筆した、永山のどか編著『住宅の社会性を考える—住宅觀と地域社会の形成ー』（晃洋書房）が刊行された。

・村上紀夫教授が『日本近代文学館』三三一七号に「地誌『雍州府志』と埋木の跡」を発表した。

・足立広明教授がキリスト教史学会において「ヒュパティ

アとエウドキアー分断と対立を超える古代末期の女性たち」

と題した研究発表をおこなった。

渡辺晃宏教授が日本女性会議二〇二二五糧原大会 分科会において「古代の女帝たちの実像に迫る」と題した講演をおこなった。

外岡慎一郎元教授が「大関ヶ原祭二〇二五」のメインイベントとして開催された岐阜関ヶ原古戦場記念館開館五周年記念 関ヶ原研究大会パネルディスカッション「関ヶ原合戦参戦武将の誤算と幸運」に登壇した。

木下光生教授が執筆した、谷本雅之編『生活存立の比較史－家政・市場・財政－』（東京大学出版会）が刊行された。

宮本亮一准教授が『シルクロードの宗教1』（帝京大学シルクロード叢書〇五）に「翻訳論文 エチエンヌ・ドゥ・ラ・ヴェシエール「玄奘の旅程に関する覚え書き」」を発表した。

村上紀夫教授が『歴史評論』九〇八号に

「書評・吉田ゆり子著『周縁化された芸能者と近世社会』」を発表した。



令和六（二〇二四）年度史学科卒業論文題目

【日本史】

国分寺の官衙的性格についての考察

—東山道を中心に—

古代荷札木簡の考察 —基礎的機能について—

古代日本の娯楽について

日本古代の皇位継承における女帝の意義

古代における祭祀とその存在意義について

聖徳太子の浄土信仰と平安浄土教

日本の古代社会形成における百済の役割

—百済の呼称「くだら」とその先進技術・文化—

平安京における災害とそれへの対応

古代のスマ信仰の変遷と金刺氏について

古代日本の対外交流と信仰

—ゾロアスター教の伝来と日本での継受—

馬の病と馬医書

☆ ☆ ☆

戦国大名の検地と太閤検地について

中世の鳥取城について

—東山道を中心とし—

岩渕 大空

河本 征樹

木下 将希

住吉 詩童

土井 康裕

今川氏親論

大友義鑑書状と大内氏

戦国期の越中国における寺崎盛永の動向

雜賀衆の実態

戦後の長野県諏訪地域における地域産業の転換

近世東大寺の財政構造

近世社会における梅毒と医者・患者・社会

近世近江国寺子屋時習斎における入門者の実態

馬の病と馬医書

相澤 一希

伊藤 匠海

遠藤 悠太

原口誠一朗

中井 植菜

林田 隼人

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

中世における熊野信仰の展開について
岡田 美洸
河野 風太

関ヶ原合戦後の浪人の選択
池田恒興について
木伏 拓海

岡田 美洸
河野 風太

新発田重家の乱と揚北衆について

岩渕 大空
河本 征樹
木下 将希
住吉 詩童
土井 康裕

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

岡田 美洸
河野 風太

木伏 拓海

眞田 真田

高谷 龍

谷川 陽香

野口 祐翔

兵永 亮太

藤本 翔太

宮崎 太郎

村田 尚哉

長野 晃久

仁科 健太

本田 優香

西南戦争と延岡の地域社会	浅井 一帆	☆	☆	☆
岡山県における果樹栽培の進展	加藤 大晴			
鈴鹿サー・キットの開設と地域社会	熊谷 虹輝			
高等女学校生徒の校内活動と生活	並河 晃平			
日本バスケットボールの技術史	新井 大地			
地方自治体の戦後復興と公営競技	石橋 直也			
近代日本の精神病者の対応とその環境	上床 風雅			
明治期神戸における肉食文化に関する一考察	川北 翔太			
兵庫県武庫郡鳴尾村の発展	木戸 海晴			
静岡事件と地域社会	杉山 知弥			
九州の狩猟文化についての一考察	高野 海斗			
祭礼に関わる禁止令についての研究	田中 利枝			
近代名古屋における芸娼妓への社会認識	都築 海月			
幕末明治期の地震災害と地域社会	友藤 健太			
伊勢暴動の展開過程について	奈須あいか			
大阪府和泉市のだんじり祭りの歴史	畠中 遥希			
河内木綿の近代化と地域社会	樋口 真未			
琵琶湖疏水と明治期の京都経済の変化	福居 優子			
淡路島における交易と地域社会	山田 武明			
被差別部落に対する社会意識とその変化	樹一 佑衣			
満蒙開拓団の戦後の引き揚げと社会復帰	岩橋 良			
一九一〇年代から一九二〇年代の日本社会の消費文化	俞 天宇			
演劇から見る昭和戦時下の銃後	金山 芽依			
一大正・昭和戦前・昭和戦後との比較もまじえてー	川畑 歩夢			
植民地期台湾の観光開発にみる帝国日本と先住民	中山みゆる			
平成期における災害発生時の官民連携の歩み	竹内 裕貴			
ー道路啓開と救援物資の輸送に焦点を当ててー	大向 大靖			
大正期「自由教育」と平成期「ゆとり教育」	前野 友吾			
ー何が同じで、何が違うのかー	松田 優			
酒類にみる昭和戦時期の経済統制	大向 大靖			
若者の進路教育・選択の昭和史・平成史	前野 友吾			
沖縄国際海洋博覧会開催への道とその後	大向 大靖			
男女雇用機会均等法の施行と働く女性の労働環境の変遷	悠伽			
バブル崩壊後の不良債権問題と大阪経済	松村 悠伽			
山内 観真				

楠木正儀の北朝帰順・南朝帰参について 戦国期の制札に関する考察	安樂 智帆	江戸時代女性のお歯黒と社会性	高木 沙耶
近世京都における博奕事情	市川 太陽	苗木藩における神仏分離冠水の要因	高橋 樹生
豊臣秀吉の吉野、高野詣に関する研究	大谷 風咲	近世後期の豊岡藩財政について	成田 葉月
後南朝小倉宮に関する考察	桜井 将吾	戦後競馬における外国産馬の影響	西下 尚輝
真田昌幸、信繁の配流生活について	柴崎 真頼	近代都市部における肉食と西洋料理の受容	箱崎 祥太
室町時代～江戸時代における鳥食文化の変遷について	下田 諭	幕末期における品川弥二郎の役割	柴崎 真頼
島原の乱における細川氏の動向について	武田 悠季	明治・大正期における薬用葡萄酒の変遷	松川奈那美
戦国期の安芸武田氏に関する考察	土屋健太朗	秀吉在城時代における姫路城とその意義	村川 和
中世天皇葬礼に関する考察	坪井 心咲	丸山遊廓における遊女と混血児の実態	柳田 拳斗
崇徳院怨霊について	中村 知尋	渡邊 乃愛	松川奈那美
持明院統光明天皇の出家・神器について	西村 和馬	【世界史】	高木 沙耶
北条時政に関する考察	藤本 二夢	清初広東における遷界令と沿海住民	沙耶 高木
「備中高松城水攻め」と「中国大返し」について	古川 晨	朝鮮肃宗代の政治党争	樹生 高橋
なぜ家康は江戸を選んだのか	松田 駿希	呂氏の乱とは何だったのか	葉月 成田
☆ ☆ ☆	松永 卓真	雲南省ハニ族の歴史・祭礼・生活文化	尚輝 西下
中近世移行期の秋葉信仰	青木 宏香	始皇帝の統一事業と秦の滅亡 －人物像と評価－	祥太 箱崎
鍋島化け猫騒動の一考察	櫻井 なつ	明代遼東の馬市について	沙耶 高木
		東アジアの大食文化とその衰退	高木 沙耶

江戸時代女性のお歯黒と社会性	高木 沙耶
苗木藩における神仏分離冠水の要因	高橋 樹生
近世後期の豊岡藩財政について	成田 葉月
戦後競馬における外国産馬の影響	西下 尚輝
近代都市部における肉食と西洋料理の受容	箱崎 祥太
幕末期における品川弥二郎の役割	柴崎 真頼
明治・大正期における薬用葡萄酒の変遷	松川奈那美
秀吉在城時代における姫路城とその意義	村川 和
丸山遊廓における遊女と混血児の実態	柳田 拳斗
渡邊 乃愛	松川奈那美
【世界史】	高木 沙耶
清初広東における遷界令と沿海住民	高木 沙耶
朝鮮肃宗代の政治党争	樹生 高橋
呂氏の乱とは何だったのか	葉月 成田
雲南省ハニ族の歴史・祭礼・生活文化	尚輝 西下
始皇帝の統一事業と秦の滅亡 －人物像と評価－	祥太 箱崎
明代遼東の馬市について	沙耶 高木
東アジアの大食文化とその衰退	高木 沙耶

三国時代の將軍職について

中国における江南と經濟

唐末宋初の沙州帰義軍

☆ ☆ ☆

前期ヴェーザ時代における社会集団に関する基礎的考察

—『リグヴェーダ』を中心として—

☆ ☆ ☆

イブン・リハルドゥーンの「叡智の学問」

—占星術・鍊金術・魔術—

セルジューク朝の歴史

—マラズギルドの戦いの意義—

☆ ☆ ☆

ルネサンスと人文主義

—ペトランカとコーラ革命—

広がるユダヤ教

—ローマ帝政期の地中海世界を中心として—

ギヨベクリ・テペと西アジア都市文明の起源について

白木 愛

古代エジプトにおけるキリスト教の受容と拡大について
杉本俊一郎

藤井 修斗

フライウス朝のローマ帝国
—元老院の関係からドミティアヌス皇帝再考史— 近池 維美

ビザンツ帝国と十字軍

—時代を通して見た十字軍とビザンツ帝国の関係について—

吉田 光佑

渡邊 時丸

武装親衛隊における外国人兵士

ヒジュラをめぐる差別と法制度の変遷

ワイマール期とナチス時代の教育行政

ジヤズとアメリカ女性

一九八〇年代冷戦とSDI

パリにおける売春取り締まりの歴史

戦後ドイツ系住民の追放・移住

南北戦争と黒人奴隸

エイズ差別問題の歴史

デパートの歴史

チヨコレートと二〇世紀社会

第二次世界大戦における沖縄戦の存在意義

昭和天皇の戦争責任についての考察

藤井 修斗

南山 日向

李 瑞華

吉田 光佑

渡邊 時丸

今枝理比人

大森 太郎

佐竹 隼乙

松谷 沙希

藤井 来夢

藤原 拓美

本田裕一朗

満富 名波

室谷 蓮

山下 祥輝

吉田 匠杜

岡上 昂平

川口 規介

日米軍事技術と原爆

日本における原子力発電所の利点と欠点

条 光輝

核抑止論からみる日米関係

歴史と土地から考察する朝鮮半島分断

笠外 朋弘

現代の日本ナショナリズムの史的検証

田邊 悠樹

戦争に起因する貧困

中島緋香留
中西真理乃

GHQによる教育制度の改革

廣岡 拓

—歴史教育の変遷を中心に—

一九五〇年代のアメリカは豊かな時代だったのか

光本丈一郎

—黄金期の日常に隠された裏側—

向井 七海

沖縄戦が及ぼした沖縄県民への影響

吉岡 敦寛

教材から消えた『はだしのゲン』と社会の反応

若本 政宗

令和六（二〇二四）年度文学研究科修士論文題目

織田信長の全国統一について

大西 純基

建武政権期から南北朝期における軍事と検断

水野 良紀

受贈雑誌及び図書

(一〇一四年一月一日～一〇一五年一〇月三一日受贈分)

【雑誌】

- 愛大史学 (愛知大学文学部歴史地理学科) 三四号
- 愛知大学綜合郷土研究所紀要 七〇輯
- 青山史学 (青山学院大学文学部史学研究室) 四三号
- 岩手史学研究 (岩手史学会) 一〇五号
- 鴨台史学 (大正大学史学会) 二〇号
- 鷹陵史学 (鷹陵史学会) 五一号
- 大分県立歴史博物館研究紀要 一二五号
- 大阪大谷大学歴史文化研究 (大阪大谷大学歴史文化学科)
- 二五号
- 大阪公大日本史 (大阪公立大学日本史学会) 二八号
- 大谷大学史学論究 (大谷大学文学部歴史学科) 三〇号
- お茶の水史学 (読史会) 六七～六八号
- 海南史学 (高知海南史学会) 六三号
- 漢学研究通訊 (漢学研究中心 台北市) 第一七一～一七五期
- 神田外語大学日本研究所紀要 一七号
- 紀尾井論叢 (上智大学 Sapientia 会) 一〇号
- 九州歴史科学 (九州歴史科学研究会) 五二号
- 京都学・歴彩館紀要 (京都府立京都学・歴彩館) 八号
- キリスト教史学 (キリスト教史学会) 七九集
- 熊本史学 (熊本史学会) 一〇五号
- CHRONOS (クロノス) (京都橘大学女性歴史文化研究所) vol. 52
- 國士館史学 (國士館大学史学会) 二九号
- 国史談話会雑誌 (東北大学国史談話会) 六五号
- 史苑 (立教大学史学会) 八五卷一～一号
- 史海 (東京学芸大学史学会) 七〇号
- 史学 (三田史学会) 九四卷一～四号
- 史学研究集録 (國學院大学大学院史学専攻大学院会) 四九号
- 志学台考古——年代・産地・分析等—— (大阪大谷大学歴史文化学科) 二五号
- 史観 (早稲田大学史学会) 一九一～一九三冊
- 四国遍路と世界の巡礼 (愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター) 一〇号
- 史泉 (関西大学史学・地理学会) 一四一～一四二号

- 史艸（日本女子大学史学研究会）六五号
- 史叢（日本大学史学会）一二一～一二二号
- 史友（青山学院大学史学会）五七号
- 就実大学史学論集（就実大学総合歴史学科）三九号
- 秋大史学（秋田大学史学会）七一号
- 上越社会研究（上越教育大学社会科教育学会）三九号
- 上智史学（上智大学史学会）六九号
- 信大史学（信大史学会）四九号
- 人文学報（東京都立大学人文科学研究科）五一～一九号
- スペイン史研究（スペイン史学会）三八号
- 住友史料館報 五六号
- 西洋史学報（広島西洋史学研究会）五一号
- 西洋史論叢（早稲田大学西洋史研究会）四六号
- 専修史学（専修大学歴史学会）七五～七八号
- 橘史学（京都橘大学歴史文化学会）三九号
- 地域研究いたみ（伊丹市）五四号
- 千葉史学（千葉歴史学会）八五～八六号
- 中央史学（中央史学会）四八号
- 中京大学文学会論叢 一一号
- 東海史学（東海大学史学会）五九号
- 東京大学日本史学研究室紀要 二九号
- 東洋史苑（龍谷大学東洋史学研究会）九九～一〇一号
- 東洋大学文学部紀要 七八集（史学科篇五〇号）
- 東洋文化研究（学習院大学東洋文化研究所）二七号
- 七隈史学（七隈史学会）二七・二八合併号
- 奈良学研究（帝塚山大学奈良学総合文化研究所）二七号
- 寧楽史苑（奈良女子大学史学会）七〇号
- 奈良時代政治史研究（奈良時代政治史研究会）五六六号
- 奈良歴史研究（奈良歴史研究会）九六号
- 鳴門史学（鳴門史学会）三八集
- 新潟史学（新潟史学会）八八～八九号
- 日本研究（国際日本文化研究センター）六九～七一集
- 日本思想史研究（東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室）五六号
- 日本常民文化紀要（成城大学大学院文学研究科）三九輯
- 日本文化史研究（帝塚山大学奈良学総合文化研究所）五六年
- 年報近現代史研究（近現代史研究会）一七号
- 年報中世史研究（中世史研究会）五〇号
- 白山史学（白山史学会）六一号

- パブリック・ヒストリー（大阪大学西洋史学会）二二一号
 弘前大学国史研究（弘前大学国史研究会）一五七～一五八号
- 文学論叢（愛知大学人文社会学研究所）一六一～一六二号
 法政史学（法政大学史学会）一〇一～一〇三号
 法政史論（法政大学大学院史学会）五二号
 北大史学（北大史学会）六四号
- 北陸史学（北陸史学会）七三号
 三重大史学（三重大学人文学部考古学・日本史・東洋史研究室）二一五号
 御影史学論集（御影史学研究会）五〇号
 三井文庫論叢 五八号
 民具マンスリー（神奈川大学日本常民文化研究所）五七卷八～一二号、五八卷一～七号
 明大アジア史論集（明治大学東洋史談話会）二九号
 メトロポリタン史学（メトロポリタン史学会）一一〇号
 ヨーロッパ文化史研究（東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所）一六六号
 米沢史学（山形県立米沢女子短期大学日本史学科米沢史学会）四〇号
- 立正史学（立正大学史学会）一三六～一三七号
 立命館史学（立命館史学会）四四号
 龍谷史壇（龍谷史学会）一六〇～一六一号
 龍谷大学日本古代史論集（龍谷大学大学院文学研究科日本史学専攻古代史ゼミナール）六号
 歴史（東北史学会）一四三～一四四輯
 歴史研究（愛知教育大学歴史学会）七〇号
 歴史研究（大阪教育大学歴史学研究室）六二号
 歴史人類（筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群人文学学位プログラム歴史・人類学サブプログラム）五三号
 和菓子（虎屋文庫）一一一号

【図書】

愛知大学人文社会学研究所研究報告論文集 蘇州の文人とその交流
 愛知大学総合郷土研究所ブックレット三四 田原藩義倉・報民倉 民に報いたいと願つた大名（石川洋一）

茨木市立文化財資料館第四回テーマ展 旧制茨木中学校

—近代教育の軌跡—

越前市史 資料編一五

大分県立歴史博物館年報二〇二四

大分県歴史資料調査報告一二 大分県仏教美術調査報告一

一 八幡大菩薩御縁起 (大分県立歴史博物館)

開館三〇周年記念 第二八回企画展 文字が語るもの (上)

高津貝塚ふるさと歴史の広場)

上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報第三〇号

畿内近国の城郭と繩張技術 (金松誠、戎光祥出版)

金鮫叢書 (徳川黎明会) 五一輯

近代都市パリの形成と民衆の世界 (木下賢一、山川出版社)

国指定史跡 真福寺貝塚 (L地点) —— 史跡整備に伴う発

掘調査概報II— (さいたま市教育委員会)

皇室制度史料 儀制 大嘗祭 二 (宮内庁書陵部)

さいたま市内遺跡発掘調査報告書第一四集 指翁井戸尻遺

跡 (第一次調査) 東宮下原口遺跡 (第二次調査) 別所

二丁目遺跡 (第一次調査) (さいたま市教育委員会)

四條畷市史資料第三集 河内国讚良郡中野村・南野村氏神

関係文書 — 平尾家文書 — (四條畷市教育委員会)

下坂田貝塚発掘調査報告書 (土浦市教育委員会)

図録 中世の乙訓・西岡と物集女城 — 古文書が語る歴史

— (向日市文化資料館)

第三九回特別展 井戸をのぞいてみれば — 考古学からみ
た井戸と人のかかわりとまつり — (四條畷市立歴史民
俗資料館)

東洋文庫百年史

日本歴史学協会年報第四〇号

彦根城世界遺産登録推進シンポジウム記録集II 世界史の
中の江戸時代 — 江戸時代、大名と城は如何に独創的で
あつたのか — (彦根城世界遺産登録推進協議会)

前新田遺跡 (第四次調査) —— 集合住宅建設に伴う埋蔵文

化財発掘調査報告書 — (土浦市教育委員会)

宮城県多賀城跡調査研究所年報二〇二四

物集女城跡国史跡記念シンポジウム報告資料集 (向日市文

化資料館)

柳沢文庫年報 第一三号 (郡山城史跡・柳沢文庫保存会)

令和五年度土浦市内遺跡発掘調査報告書 (土浦市教育委員会)

令和七年度平城宮跡資料館秋期特別展 ナラから平城へ
(奈良文化財研究所平城宮跡資料館)

『奈良史学』四二号をお届けいたします。本号は、一〇一五年三月に定年退職された井岡康時教授、外岡慎一郎教授の退職記念号となります。

両先生には、学生諸君のみならず教員諸氏もまた、いいあらわせないほどにお世話になりました。この場をかりて、あらためて御礼申し上げたいと思います。

本号に掲載された文章のうち、「史料紹介 奈良町の寺社案内人と西本願寺の紛議」を執筆した奥本武裕先生は、井岡先生の後任として二〇一五年四月に着任されました。日本近代史を専門とされています。

また、「書評 外岡慎一郎著『武家権力と使節遵行』」を執筆した松藤拓也氏は、外岡先生のもとで研鑽を積んだ大学院生となります。

ともに、井岡先生、外岡先生と深い縁でむすばれた執筆者諸氏の手になる文章となりますが、「北京崇国寺元代石刻目録補訂」は、名譽教授である森田憲司先生が『奈良史学』四二号にて発表した文章をより充実した内容とすべく補訂され

たものとなります。

このように、『奈良史学』は、学生・大学院生・教員のみならず、名譽教授や非常勤講師としてお世話になつてている先生方が研究成果を発表する場であるとともに、自由かつ活発な議論をかわすことができる場ともなつております。

今後も、ますます活発な議論がかわされる場に育つていくよう微力をつくして参りたいと思っておりますので、ひきつづき、かわらぬご支援、ご協力をお願いしたく思います。

なお、『奈良史学』は、二二一号（一〇一五年）以降、本四二号にいたるまで、奈良大学リポジトリ https://nara-u.repo.nii.ac.jp/search?query=1717820810057&page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1717820810057 にて閲覧、ダウンロードすることができます。

一号から二二一号のリポジトリ化もすすめて参りたいと考えておりますが、同時に、可能なかぎり紙媒体としての雑誌も継続し発行して参りたいと考えています。

長期にわたりテキストデータを保存しようと考えたとき、デジタルよりむしろ紙媒体のほうが年月に耐えうるという経験を日常的に古文書などを取り扱っている歴史学徒はまのあたりにしています。本号もまた、デジタルと紙の両面からご味読いただければと思います。